

## 高田さんとテニス

吉 岡 曠

この文章を書くに当って考えてみたのですが、高田さんのような碩学で気難しい人といつどういきさつで言葉を交すようになったのか、どうしても思い出せません。ただ、二十年ほど前に、当時私が所属していたテニスクラブに高田さんをお誘いし、高田さんも私の誘いに応じて入会されたわけですから、その頃すでにその程度に親しい間柄になっていたことは確かです。以来二十年間、毎週少くとも二回はコート上で顔を合わせるという関係が現在まで続いています。

往事茫茫ですが、当時の高田テニスを思い出すと、三つぐらいの特色が指摘できます。一つはその打球ですが、テニスをやる前に卓球をやっていたとかで卓球流のすくうような打ち方をするものから、高田さんの打球の大半は高くゆっくりと弧を描いて飛ぶ、いわゆるロブというやつです。もっとも、御当人はロブを上げているつもりは毛頭ありませんから、正確にはロブとはいえないのかも知れません。二つ目は、高田不動尊というニックネームが端的に物語っているように、なにしろ動かないテニスでした。身の回りに飛ん

でくる球にしか手を出してくれませんから、高田さんとペアを組むと普通の倍は運動することになります。三つ目は、これが高田テニスの真髄であり、あるいは強さの秘密といってもよいかも知れませんが、敵も味方も、とにかく人間は一切眼中にないのです。山があるから登る、球がくるから打つ。飛んでくる球にしか精神を集中しませんから、いきおい打ち方が丁寧になり、ミスが少くなります。打ち合っているうちにいやになって、小細工を弄そうとしてはこちらが自滅するというケースが往々にしてあったようです。

以上の三つの特色は基本的には現在も変わっていないように見受けられますが、高田さんの名譽のためにつけ加えておきますと、打球については、打ち方はそう変わったようには見えないのに面がよく変わったせいか、いつの頃からか低くてかなり強い球が飛ぶようになりました。不動尊の方も、走っているという印象はないのですが、いつの間にか移動して球の落下点のそばに立っているようになりました。これらの変化が徐々に徐々に現れる一方、丁寧でしつこい返球は相変わらずというわけで、私の対高田戦の勝率はある時期を境にひどく

悪くなりました。もう一言いいますと、あの頃の見事な太鼓腹は今や見るかげもなく、むしろ瘦軀といってよい体型に変わりました。まことに往事茫茫です。

私は高田さんから度々御著書を頂戴し、かなり熱心に拝読もしているのですが、私には高田さんの学問について語る資格はありません。ただ言えることは、高田さんほどその学問と思想とが一体になっている学者は稀なのではないかということです。少くとも国文学の世界では、そういう学者は本居宣長をもって最後とするといってもよからうと思います。高田さんの口調はぼそぼそして聞き取りにくいし、話の本身も私には半分ぐらしかわからないのですが、テニスを切り上げて、暮れなずむ空を眺めながらビールのコップを傾け、ぼそぼそした会話のような独白のような話に耳を傾けて、学問と思想と生き方が高田さんという人間の中で三位一体になっている消息を改めて実感する時間は、私にとっては至福といつてよい時間です。私はほかのテニス友達と共に、定年後の高田さんから中国文献の講義を受ける約束になっています（何を教えてくれるのかはまだわかりません）。高田さんとテニスをし、高田さんの話に耳を傾け、高田さんの講義を聴く、そういう人生があたう限り続かんことを、心から念じています。